

中国における仏伝受容

——漢訳仏伝の変容を通して——

采 翠 晃

問題の所在

従来、仏教研究は、教義や思想がその対象であった。自然と、学問僧の著作の読解を通してそこに説かれる教義を確認したり、經典の描写の中にさまざまな思想の痕跡を摘出したりしていく作業が中心となってきた。仏教研究において、こういった作業が基本となることは論を俟たない。

一方で、このような研究からはどうしても漏れてしまう側面がある。それは、仏教の言葉（とりわけ、經典において語られる物語）のどこが人びとの心を捉えたのかという側面である。人びと、とりわけ仏教専従者以外の人びとの心を捉えたのは、難解な教義ではなかった筈である。人は難解な教義理論そのものに共感することはできない。宗教は必ず物語という形式を伴って伝承される。仏教が宗教という側面を持っている以上、仏教が伝えてきた何らかの物語が信仰者の共感と呼んだからである。

仏教は、基本的に、苦からの解脱を目指す教えである。この教えに共感するためには、苦を強烈に感じていなくてはならない。だが、仏教自身が指摘しているように、衆生は苦を厭うどころかそれを求めようとさえしてしまうのが

常である。⁽¹⁾ それにも拘わらず、これほどにまで仏教が受け容れられているのは、何に依るのだろうか。仏教の特徴の一つは、説話が極めて豊富に伝えられていることにある。經典に説かれる譬喩も豊富である。また、これらは絵画・工芸やさまざまな文芸作品にも取り入れられている。これらの説話は人々の心を極めて強力に擱んでいると言つてもよい。仏教は、さまざまな説話に溢れている。しかして、最も重要な「物語」は、言うまでもなく、釈尊の伝記すなわち仏伝である。

従来の仏伝研究は、漢訳經典を素材として取り上げてはいても、どのような系統に属するのか、どのような影響のもとに成立したものか、といった研究が中心であった。このような研究は、結集者がどのように仏伝を捉えていたかに焦点を当てたものだと言えよう。しかるに、結集者ではない人びとがどのように仏伝を受容したかを考えていくには、また異なったアプローチが重要になる。

本稿では、中国においていかに仏伝が受容されたかを中心に考察していくことにしたい。

中国における仏伝受容

仏教、殊に大乘仏教の受容において、教理教説の受容が仏伝になぞらえて為されてきたことは、横超によって『法華經』を素材として早くから論じられてきた。⁽²⁾ しかしながら、これはあくまでも經典の結集者や伝承者に焦点を当てたものであり、受容者に焦点を当てたものではない。

また、中国仏教に視座を置いて考察することには、少なからぬ意味があると考えられる。中国に仏教が伝来した際、さまざまな発達段階のものが一度に流入した。そのため、仏教を受容し始めた頃の中国の人びとは、例えば、阿含經典と大乘經典とを系統の異なるものとして区別することはなかった。このことは、僧祐（四四五―五一八）による「釈迦譜目録序」⁽³⁾に挙げられた出典を見ても窺える。

迦始祖劫初刹利相承譜 第一「出長阿含經」⁽⁴⁾
 釈迦始祖劫初姓瞿曇緣譜 第二「出十二遊經」⁽⁵⁾
 釈迦六世祖始姓釈氏緣譜 第三「出長阿含經」
 釈迦降生釈種成仏緣譜 第四「出普曜經」⁽⁶⁾
 釈迦在七仏末種姓衆數同異譜 第五「出長阿含經」
 釈迦同三千仏緣譜 第六「出葉王葉上觀經」⁽⁷⁾
 釈迦内外族姓名譜 第七「出長阿含經」
 釈迦弟子姓釈緣譜 第八「出增一阿含」
 釈迦四部名聞弟子譜 第九「出增一阿含」⁽⁸⁾
 釈迦從兄調達出家緣記 第十「出中本起經」
 釈迦從弟阿那律跋提出家記 第十一「出曇無德律」⁽⁹⁾
 釈迦從弟孫陀羅難陀出家緣記 第十二「出出曜經」⁽¹⁰⁾
 釈迦子羅云出家緣記 第十三「出未曾有經」⁽¹¹⁾
 釈迦姨母大愛道出家緣記 第十四「出中本起經」
 釈迦父淨飯王泥洹記 第十五「出淨飯王泥洹經」⁽¹²⁾
 釈迦母摩耶夫人記 第十六「出仏昇忉利天經」⁽¹³⁾
 釈迦姨母大愛道泥洹記 第十七「出仏母泥洹經」⁽¹⁴⁾

釈種滅宿業緣記 第十八
 釈迦竹園精舍緣記 第十九「出曇無德律」
 釈迦祇洹精舍緣記 第二十「出賢愚經」⁽¹⁵⁾
 釈迦髮爪塔緣記 第二十一「出十誦律」
 釈迦天上四塔記 第二十二「出集經抄」⁽¹⁶⁾
 優填王造釈迦金像記 第二十三「出增一阿含經」
 波斯匿王女造金像記 第二十四「出增一阿含經」
 阿育王弟出家造石像記 第二十五「出求離牢獄經」⁽¹⁷⁾
 釈迦留影在石室記 第二十六「出觀仏三昧經」⁽¹⁸⁾
 釈迦双樹般涅槃記 第二十七「出大涅槃經」⁽¹⁹⁾
 釈迦八国分舍利記 第二十八「出双卷泥洹經」⁽²⁰⁾
 釈迦天上舍利宝塔記 第二十九「出菩薩処胎經」⁽²¹⁾
 釈迦龍宮仏髭塔記 第三十「出阿育王經」⁽²²⁾
 阿育王造八万四千塔記 第三十一「出雜阿含經」⁽²³⁾
 釈迦獲八万四千塔宿緣記 第三十二「出賢愚經」⁽²⁴⁾
 釈迦滅尽緣記 第三十三「出雜阿含經」
 釈迦法滅尽相記 第三十四「出法滅尽經」⁽²⁵⁾

こゝには、僧祐が依拠した經典が挙げられている。当然ながら、阿含系の經典に依拠することが多いものの、『葉王

『藥上觀經』などの大乘經典も並び挙げられていることが注目される。

このような流入仏典の系列の混乱のみばかりではない。中国の思想的状況も大きな影響を与えた。

仏教は、中国古来の文化に根ざした宗教では無い。ましてや、中国人とりわけ漢人には「中華思想」と呼ばれる考え方が根強くあったとされる。そのような人びとが夷狄の宗教である仏教を受容するには、よほど強烈な共感があつたと見なくてはならないだろう。そこには、中国人独自の切り口が付加されたはずである。

従来、中国人独自の視座を明らかにしようとするに当たってはいくつかの問題があつた。中国では、漢訳された仏典をベースにして仏教が展開した。そのためもあつて、中国における仏教受容の特異性を探ろうとするには、彼らが利用した經典が何であつたか、そのオリジナルはどのようなものであつたのか、を探るといった方法が採られることが多い。この研究方法は極めて妥当であるように見える。しかし、この方法で研究を進めていくと、漢訳以前の原典が〈正しい〉ものであり、漢訳されたもののみに見られるヴァリエントは漢訳者による錯誤であるかのような錯覚を与えがちである。

本考察では、それらのヴァリエントを、あるべからざる錯誤として見るのではなく、共感をより強固なものとするために不可避的に発生した〈省略〉や〈誇張〉として見ていく。

仏伝の訳出状況

中国仏教は、漢訳された經典をベースにして展開した。従つて、仏伝經典の漢訳状況を確認するのは重要である。⁽²⁶⁾

仏伝經典は、「本縁経」「本起経」などと呼ばれる。「本縁」とは「アヴァダーナ（譬喩）」の訳語と考えられる。⁽²⁷⁾ 然るに、その内容には釈尊の過去世物語を含むものが中心である。恐らくは、「本生にもとづく譬喩」といったニュアンスを込めたのであろう。

中国に仏教が伝わり始めた紀元後では、インド・西域においては、釈尊の物語は前生譚（ジャータカ）を含むものが中心であったと考えられる。釈尊前生譚である『太子慕魄經』一卷が、中国仏教の最初期である安世高によって訳出された⁽²⁸⁾と伝えられていることは注目される。

また、三国時代には康僧会によって『六度集經』八巻が訳出されている。これは、前生譚を、菩薩の修行徳目である六度（六波羅蜜）別に整理したものである。同様の經典として、呉の支謙が訳出した『菩薩本緣經』三巻などがある。これらには、既にある程度発達し整理された菩薩思想を見出すことすら出来る。

このように、仏伝は、極めて早くに中国にもたらされたが、いずれも、ブツダがどのような人物かを語るのに、前生譚が中心に据えられている。実際に伝承通りの訳出であるかどうかには幾許かの疑問があるにしても、後漢代や三国時代にはかなりの数の仏伝が訳出されていたのであり、その大半においては前生譚が重要な位置を占めていたのである。

現在にまで伝えられている仏伝經典の内容を確認すると、ほとんどの經典が過去世の物語から説き起こしていることが窺える。現存經典中、前生譚から始まらないものは、管見では次の五經しかない。

曇無讖訳『仏所行讃』

降誕以降

宝雲訳『仏本行經』

托胎以降

僧伽跋澄等訳『僧伽羅刹所集經』

成道以降

迦留陀伽訳『仏説十二遊經』

降誕以降

曇果・康孟詳訳『中本起經』

成道以降

『中本起経』について

これらの中で、特に注目されるのが『中本起経』である。

この經典は、翻訳者等が明確な仏伝經典としては、恐らくは最も早くに訳出されたものである。『出三蔵記集』には次のように示されている。

中本起経二卷「或云太子中本起経」

右一部。凡二卷。漢献帝建安中。康孟詳訳出⁽²⁹⁾

『中本起経』二卷は、康孟詳と曇果との共訳として現在にまで伝えられている⁽³⁰⁾。後漢献帝の建安年間は一九六―二二〇であり、この經典が中国仏教の歴史の中でも極めて初期に訳出されたことは間違いない。この『中本起経』訳出は康孟詳の中心的な業績と考えられていたようで、右に見るように『出三蔵記集』巻第二「新集経論録」に康孟詳唯一の訳出として挙げられているばかりではない。『出三蔵記集』巻第十三「安玄伝」に康孟詳への関説がある⁽³¹⁾。

次に康孟詳なる者有り。其の先（先祖）は康居の人なり。『中本起』を訳出せり。安公（釈道安）は、孟詳の出せる経を「奕奕流便にして、足は玄趣に騰^{のほ}れり」と称えたり。

ここにも、『中本起経』のみを康孟詳の業績として挙げている。また、ここでは釈道安がその訳文を賞賛したと紹介している。以て『中本起経』の影響力の大きさが知られる。

この『中本起経』は、最初期に翻訳された仏伝経典としては、きわめて興味深い特徴を持っている。すなわち、降魔成道した後、五比丘に対する鹿野苑での説法から始まっているのである。

その冒頭部分を次に挙げる。⁽³²⁾

阿難曰く、吾昔仏より是くの如きを聞けり。一時、仏は、摩竭^{マカダ}提界善勝道場の元吉樹下に在り。徳力もて降魔し、覺慧神靜にして、三達無礙たり。二りの賈客^{ふた}、提謂^{トラフサ}と波利^{バツリカ}とを度したまい、三自帰^{三帰依}（三帰依）を授け、然して五戒を許し、清信士と為したまへり。已に惟ふに昔先仏あり、名を定光^{テイバンカラ}と曰ふ。吾が仏名を拝し、「汝、来世九十一劫に於て。当に仏と作ることを得て、釈迦文と字^{あな}し、如来・至真・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・衆祐と号すべし。人を度すこと我が今の如くならん」と。吾（釈迦仏）^{このか}はより來た、本心を修治し、六度無極にして。功を積み行を累ね、四等倦まず、高行殊異にして、苦を忍ぶこと無量に、功報遺すこと無く、大願果して成ぜり。

ここには、前生譚はおろか、成道前の物語すら説かれていない。過去仏としての定光仏（ディーパンカラ・ブツダ）が前世の釈尊に授記した人物として登場はする。しかしながら、それは釈尊の過去世物語への導入とはなっていない。そもそも「本起」という経題からすれば、釈尊の前生譚を中心に述べるべきなのであるが、内容はそれに従ったものとはなっていない。

『中本起経』と同じ康孟詳によつて訳出されたとされる『修行本起経』⁽³³⁾では、錠光仏（定光仏）⁽³⁴⁾の世に授記されて精進した結果兜率天に生じることが述べられているのとは対照的である。また、同じく康孟詳の訳とされる『仏說興起行経』⁽³⁶⁾は、釈迦仏現生の苦痛の原因を前世での悪業に求めている。その内容的にも極めて興味深い内容ではあるが、

本論の関心からは前生譚に多大な関心が払われていることを指摘しておきたい。

『中本起経』が右に見たような構成になっているのは、原典からかなりの改変が加えられていると考えるべきであろう。当初からこのような内容であったとすれば「本起」という経題と合わないからである。ここには、中国人自身のイメージが関与した変容があったと見なくてはならない。

なお、『中本起経』の前には、現在『修行本起経』として伝えられる経典が連続していたとも考えられている。⁽³⁷⁾『修行本起経』には前生譚が含まれている。このことから、『中本起経』に前生譚が含まれていないのは当然のことだと考える向きもある。

しかしながら、既に見たように、『出三蔵記集』では康孟詳の訳経として取り上げられているのは『中本起経』一経のみである。また、『中本起経』漢訳前の原典は、前生譚から仏滅まで一連のものであった可能性もある。しかしながら、本論の関心からすれば、前生譚を含まない仏伝経典として『中本起経』が流通していたことに注意しておかねばならない。

中国では、インドのような輪廻思想は前提となっていなかった。従って、聖人としてのブツダの物語を受容していくに際しては、中国独自の変容が不可欠であったはずである。その変容とは、ブツダ物語から前世部分をなるべく捨象することであった可能性は低くない。

『理惑論』中の仏伝

さて、このように經典の変容に表れる仏伝観は、渡来僧のものではなく、中国人のものであったことをどのように確認しうるであろうか。

ここで注目したいのが、『理惑論』⁽³⁸⁾である。

『理惑論』の冒頭には仏伝が収められている。『理惑論』の作者とされる牟子が、どのような人物であるかは、いまだ議論が収束していない。いずれにせよ、牟子が後漢代に活躍した人物であることは間違いないようである。これは、中国人自身の手によって編まれた（つまり、翻訳したものではない）仏伝として、現存最古である可能性が高く、少なくとも最初期に属する文献であることは間違いない。

さて、その『理惑論』中の仏伝は、論の冒頭に置かれ、次のような問いに対する答えとして述べられるものである。

ある人が次のように尋ねた。「仏はどこから生まれたのか。先祖や祖国はあるのだろうか。何をしたのでだろうか。どのような姿をしていたのだろうか。」

これに続いて、牟子の仏教概説が述べられるが、仏がどのような人物であるかが述べられている。⁽⁴⁰⁾

牟子は次のように答えた。「大變広範にわたるお尋ねですが、不十分ながら、その概要をお答え致します。

〈前生（？）〉

聞くところに依りますと、仏が教化をなさる形は「およそ次のようなものです」。道の徳を積み重ねることは数千億年にもわたり、記録することはできません。

〈降誕〉

そして、仏に成ろうとする時には、天竺に生まれるには、仮に白淨王の夫人「の胎内」に形をとりました。

「夫人は」昼寝をした際に六本の牙をもつ白象に乗る「仏の姿を」夢に見、これを大変喜びました。そうして懷

胎なされたのでした。四月八日に、母（夫人）の右脇から生まれました。（生まれて）地につくや、七歩あゆみ、右手を挙げて「天の上にも天の下にも私を超える者はいない」とおっしゃりました。その時に天地は大いに動き、宮中はみな明るく「照らされました」。その日には青衣（下女）もまた一人の子どもを産みました。厩^{うまや}には白馬の中でもミルクのように白い馬がいました。その「下女が産んだ子ども」は車匿^{チャンナ}と呼ばれていました。馬は捷陟^{カクツカ}といいました。王は常に「車匿を」太子に付き従わしめました。

〈仏の姿〉

太子には三十二相八十種好があり、身の丈は一丈六尺あり、体はみな金色で、頭頂には肉髻があり、頬車（アゴの付け根部分）は獅子のようであり、舌は顔の面を覆うほどであり、手のひらには千輻輪があり、うなじの輝きは万里を照らします。これで仏の姿を簡単に説明しました。

〈結婚と息子の出生〉

十七歳になると。王は「太子に」妃を迎えさせました。「妃は」隣国の女性でした。太子は「妃がとなりに」座つても座を移動させ、寝るときには床を異にしました。「そうはいっても、」ものごとの道理として、「妃は」ついに一人の男の子を懐胎し、六年経ってから生まれました。

〈出家から成道まで〉

父王は太子を大切に想われて、宮殿を建てて、妓女や宝などの珍しいものを太子の前に列ねました。「しかしながら」太子は世間の楽を食ふことなく、心は徳を道めることにありました。十九歳の四月八日の夜半に車匿を呼び捷陟を牽かせてこれに跨がり、鬼神も太子を助けて、空中を飛んで王宮を出ました（出家）。王も官吏も民衆も、「王子を」追いかけて郊外まで行きました。王は次のように言いました。「お前が生まれる前は「跡継ぎが生まれるように」神にも祈り願った。いまやお前がいて、玉や珪のように大切にしている。王位を嗣ぐべきなの

に去るとはどういうことか」と。太子は次のように言った。「万物は無常であり、存在するものは必ず亡びる。いま道を学ぼうとするのは、十方の人びとを救いたいからです」と。王は太子の志が非常に堅固であることを知って、ついに座を起つて王宮に還り、太子も去つて行つたのです。太子は、道を思うこと六年にして、遂に仏と成りました。

ここには、前生譚とも言えるような部分が一部見られる。しかし、具体性に欠けており、概括的な記述が為されているだけである。表面的なその表現からは前世の事柄とは読み取れない。ある意味、中国の伝記によく見られる「幼少期から優秀であつた」云々という内容になぞらえられたものであるとも考えられる。

このように、仏伝を今生に限って見ていこうとする態度は、中国においては、「前世」「前生」という概念に馴染みがなかつたことに依ると考えられる。

「理惑論」においても、十二番目に「神は更生するか」という問答が設けられており、関心の高さが窺える。これに対する牟子^{（1）}の答えは、正面から答えることを避け、「生きている時にどのような行為をするかが大事なのであり、生きているか死んでいるかは関係無い」といった形で問いをはぐらかしている。

このように見えてみると、従来よりしばしば参照されてきた『後漢紀』の記述は、意味づけが異なる可能性がある。

「浮屠」、「仏」たるや、西域天竺^{（2）}国に仏道有り。「仏」とは、漢には「覺」と言ふなり。將に「覺」を以て群生を悟らしむるなり。其の教は脩善慈心を以て主と爲し、殺生せず、専ら清静を務む。其の精なる者を沙門と爲す。「沙門」は漢には「息」と言ふなり。蓋し「息」の意は欲を去りて無爲に帰するなり。又以爲へらく、人死すとも精神滅せず、復た形を受くるに随つて、生ける時の善悪には皆報応有り。……故に王公大人、死生報応の際を

観じて、矍然として自失せざる莫し。

この最後の部分は、中国人が馴染みの無かった輪廻転生思想を受け容れる時の衝撃として見られることが多かった。しかしながら、むしろ、中国人が輪廻思想をなかなか受け容れられなかったさまを表したものと見て捉えるべきであろう。

むすび

中国に仏教が伝わり始めた頃、西域やインドでは、仏伝には前生譚がつきものであった。むしろ、前生譚の方が主体であったと言っても良い。特に、大乘仏教は、前生譚を土台にして菩薩思想を顕揚していったと考えられている。しかるに、中国にはインドや西域の状況が概ね反映された形で經典が翻訳されていた。現在にまで伝わる仏伝經典の内容を見てもこのことは確認できた。

しかしながら、中国人自身の仏伝受容はそれとは異なるものとなった。中国人は、前生譚をほぼ完全に切り離して仏伝を受容する。中国人が捉える釈尊の生涯は、この世界に人として生まれるところから始まるのである。特に、中国仏教は、伝来のかなり早い時期から「大乘」を志向したと考えられている。それにも拘わらず、大乘仏教の思想基盤の一つであった本生譚に対しては、大きな関心を払っていないことは注目すべきであろう。

中国における釈尊観は、大乘思想に向かいながらも、インドや西域のそれとは大きく異なるものとなっていることが窺えるのである。

（本稿は、二〇一五年九月五日に創価大学で開催された日本宗教学会第七十四回学術大会において発表した「仏伝受容の物語論的視座からの一考察——漢訳仏伝を素材として——」の一部に、大幅に加筆したものである。）

『キーワード』『理惑論』、『中本起経』、前生譚

註

(1) 例えば、『法華経』「譬喻品」の火宅喻では、火事になった邸宅の中にいる子供たちが衆生に喩えられる。炎（煩惱を喩える）がまわり、子供たちに迫り来て熱風など様々な苦痛を与える。しかしながら、「苦痛」を切^せむれども、心厭患せず」（大正九・一二c）と、炎を避けようとするどころか、却ってこれと戯れる様子が描かれている。

(2) 早くからの指摘としては、横超の次の論考が挙げられよう。

横超慧日「法華経の一乗思想と仏伝」『東宝学報東京』六 [1936]（『法華思想の研究』平楽寺書店 [1986] 所収）
また、最近にも次のような研究書が公刊されている。

平岡聡『大乘經典の誕生——仏伝の再解釈でよみがえるブッダ』筑摩書房 [2015]

右に挙げたのはいずれも『法華経』を素材としたものである。また、ブッダ観がどのように変化していったのかを異なった角度から考察した著作として、次のものが挙げられる。

末木文美士、吉永進一、大谷栄一編『ブッダの変貌——交錯する近代仏教——』法蔵館 [2014]

また、中国における仏伝經典の訳出状況をまとめたものとして次の研究がある。

河野訓『漢訳仏伝研究』皇学館大学出版部 [2007]

これは本論考と関心が重なるものではあるが、やはり系統研究が中心である。

(3) 『出三蔵記集』卷第十二（大正五五・八七c～八八a）

(4) 仏陀耶舎・竺仏念訳『長阿含経』二十二卷。大正一所収。No.1。

(5) 迦留陀伽訳『仏説十二遊経』一卷。大正第四卷所収。No.195。

(6) 竺法護訳『仏説普曜経』八卷のことであろう。大正三所収。No.186。

(7) 瞿良耶舎訳『仏説觀藥王藥上二菩薩経』一卷。大正二〇所収。No.1161。

(8) 瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』五十一卷。大正二所収。No.125。

(9) 「曇無徳」は、dharmaguptakaの音訳で、法蔵部のこと。『曇無徳律』は、法蔵部が伝持していた『四分律』を指す。

仏陀耶舎と竺仏念とによる共訳。大正二二所収。No.1428。

(10) 竺仏念訳『出曜経』三十卷。大正四所収。No.212。

(11) 失訳『仏説未曾有経』一卷（大正一六所収、No.688）が現在にまで伝わるが、内容的に一致しないか。

(12) 沮渠京声訳『仏説浄飯王般涅槃経』一卷。大正一四所収。No.512。

(13) 竺法護訳『仏昇忉利天為母說法経』三卷。大正一七所収。No.815。

(14) 慧簡訳『仏母般泥洹経』一卷。大正二二所収。No.145。

(15) 慧覺等訳『賢愚経』十三卷。大正四所収。No.202。

(16) 詳細不詳。特定の經典を表す固有名詞ではなく、諸經典からの要略集である可能性もある。

(17) 未詳。費長房『歷代三宝記』では安世高訳として挙げる（大正四九・五二a）ものの、現存しない。

(18) 仏陀跋陀羅訳『仏説観仏三昧海経』十卷。大正一五所収。No.643。「観仏三昧経」という呼称は、『出三蔵記集』（大正五五・一一c）に見出せる。『出三蔵記集』では「八卷」の調卷とされている。

(19) 法顯訳『大般涅槃経』三卷（大正一所収。No.7）か、法顯訳『仏説大般泥洹経』六卷（大正二二所収。No.376）、曇無讖訳『大般涅槃経』四十卷（大正一二所収。No.374）のいずれかであろうと考えられる。

(20) 白法祖訳『仏説般泥洹経』二卷（大正一所収。No.3）と失訳『般泥洹経』二卷（大正一所収。No.6）とが現在に伝わる。いずれの経も仏舍利を分けて仏塔を建立したことに關説しており、いずれを参照したものであるかは不明である。

(21) 竺仏念訳『菩薩處胎経』五卷であろう。現在にまで伝わらず。『出三蔵記集』（大正五五・一〇c）に出る。

(22) いずれの経に依るか未検。

(23) 求那跋陀羅訳『雜阿含経』五十卷。大正二所収。No.99

(24) 慧覺等訳『賢愚経』十三卷。大正四所収。No.202

(25) 失訳『仏説法滅尽経』一卷（大正一二所収。No.396）か。『出三蔵記集』中でも既に「失訳雜経録」に挙げられている（大正五五・二八c）。

(26) 現在にまで伝わる仏伝經典は、『大正新脩大蔵経』では「本縁部」（第三卷・第四卷）に収められている。

(27) 「アヴァダーナ」という語は「譬喩」と訳されるが、その譬喩の内容は釈尊の前章での物語が語られることが殆どである。

(28) もっとも、『出三蔵記集』においては安世高訳出經典（大正五五・五c～六b）としては挙げられておらず、竺法護訳出經典中の今有經として挙げられている（大正五五・八b）。

(29) 僧祐『出三蔵記集』（大正五五・六c）

(30) 『大正新脩大藏經』第四卷所収。No.196

なお、本經中に伝えられる仏伝が系統がどの部派の系統に属するについては、奥村浩基に論考がある。

『中本起經』における説話傳承の系統について——「仏食馬麥品」を中心に——『仏教学セミナー』八九 [2009]

『中本起經』における説話傳承の系統について2『世界宗教学刊』一四 [2010]

『中本起經』考『印度学仏教学研究』六〇—一 [2012]

(31) 『安玄伝』『出三蔵記集』卷第十二（大正五五・九六a）

次有康孟詳者。其先康居人也。訳出中本起。安公称。孟詳出經。突奕流便。足騰玄趣。

「突奕」は積み重なるさま。

(32) 『中本起經』卷上（大正四・一四七c）

阿難曰。吾昔從仏聞如是。一時仏在摩竭提界善勝道場元吉樹下。徳力降魔。覺慧神靜。三達無礙。度二賈客。提謂波利。授三自歸。然許五戒。為清信士。已惟昔先仏。名曰定光。拜吾仏名。汝於來世九十一劫。當得作仏。字釈迦文。号如來・至真・等正覺・明行成為・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・衆祐。度人如我今也。吾從是來。修治本心。六度無極。積功累行。四等不倦。高行殊異。忍苦無量。功報無遺。大願果成

なお、ここに「六度」の語が見られること、辟支仏や阿羅漢と対比させて「大乘」という語が用いられている（大正四・一五五b）が、奥村 [2012] は經中の説話内容は有部の所伝と共通すると指摘している。或いは、これらの大乘仏教を想起させる語は中国において添加された可能性がある。

(33) 『修行本起經』や『仏說興起行經』が康孟詳の訳出であるか否か、また康孟詳なる者がいかなる人物であったかについては、極めて興味深い課題であるが、今は措き、他日を期したい。

(34) 二卷。大正三所収。No.184。

(35) 『修行本起經』卷上「現變品」第一（大正三・四六一b～四六三a）

(36) 二卷。大正四所収。No.197。

(37) 常盤大定「中本起経解題」『国訳一切経』(三三二六頁)では次のように述べる。

元来中本起経は一つの仏伝の後半をなしてゐるもので、この経の前半を説くものに、修行本起経なる、姉妹経がある。この両者を合すれば、かなりよく纏まつた仏伝となる。

(38) また、柏原信行も「修行本起経に続く内容」とする(『中本起経』『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版[1998])。

僧祐『弘明集』巻上所収。『牟子理惑論』『治惑論』などとも呼ばれる。以下『理惑論』と称する。京都大学人文科学研究所『弘明集研究』巻中(訳注篇上)[1974]を参照。

(39) 『弘明集』巻上(大正五二・一c)

或問曰。仏從何出生。寧有先祖及国邑不。皆何施行。状何類乎。

(40) ()内は采擧が付した見出し。私に改行を施した。(大正五二・一c—二a)

牟子曰。富哉問也。請以不敏。略說其要。

〈前生(?)〉

蓋聞仏化之為状也。積累道德。数千億載。不可紀記。

〈降誕〉

然臨得仏時。生於天竺。仮形於白淨王夫人。昼寢夢乘白象身有六牙。欣然悦之。遂感而孕。以四月八日。從母右脇而生。墮地行七步。举右手曰。天上天下靡有踰我者也。時天地大動宮中皆明。其日王家青衣復産一兒。廂中白馬亦乳白駒。奴字車匿。馬曰捷陟。王常使隨太子。

〈仏の姿〉

太子有三十二相八十種好。身長丈六。体皆金色。頂有肉髻。頬車如師子。舌自覆面。手把千輻輪。項光照万里。此略說其相。

〈結婚と息子の出生〉

年十七王為納妃。隣国女也。太子坐則遷座。寢則異床。天道孔明。陰陽而通。遂懷一男。六年乃生。

〈出家から成道まで〉

父王珍偉太子。為興宮觀。妓女宝玩並列於前。太子不貪世樂。意存道德。年十九四月八日夜半呼車匿勒撻陟跨之。鬼神扶拳飛而出宮。明日廓然不知所在。王及吏民莫不歎欷。追之及田。王曰。未有爾時禱請神祇。今既有爾。如玉如珪。當統祿位而去。何為。太子曰。万物無常有存當亡。今欲學道度脫十方。王知其弥堅。遂起而還。太子徑去。思道六年遂成仙焉。

(41) 袁宏 (328-376) 『後漢紀』卷第十「孝明帝紀」下 (『後漢書』所引)

浮屠、仙也、西域天竺国有仙道焉。仙者、漢言寬也、將以寬悟群生也。其教以脩善慈心為主、不殺生、專務清靜。其精者為沙門。沙門、漢言息也、蓋息意去欲而歸于無為。又以為人死精神不滅、隨復受形、生時善惡皆有報應。……故王公大人觀死生報應之際、莫不矍然自失